

第十問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 『淡江抽斎』ぐらいいは読んどけ

② 作品としての『淡江抽斎』をはじめとする一連の史伝は、あのときの父の捨てぜりふのような言葉といっしょに、私のなかでくすぼりつづけた。あんなふうに父が言ったからには、なにか根拠があるにちがいない。そうも考えたし、父だけでなく、たとえば自分がこの人と思って尊敬した作家である石川淳が鷗外の偉大さを繰り返し語っているかぎり、その価値が理解できないのであれば、それは当方の無知無学ゆえに決まっていたから、あせった。ながいこと、解るような気がしたりまた解らなくなったりのあいだを私は往き来し、もちろん鷗外だけにポットウしていたわけではないけれど、ときには鷗外にはまったく語りの才能が欠けていたのではないかと判断してこの面倒な作品群から逃げようとしたこともあるほど、私にとっては厄介な作者でありつづけた。

③ その後も、私のほうは森鷗外について離れたり、時間が過ぎたが、父は鷗外の史伝から興味をつなげて、江戸の大名や旗本のスジョウやケイフ、知行高などが記された武鑑²というのを神田で漁^{あさ}っては買いあつめるようになった。一九六七年に夫が死んですぐあと、母が病気で危篤になり私がイタリアを離れて帰国していた時期に、父は毎晩、母のいない二階の座敷で、暗いスタンドをつけておそくまでそれらの武鑑に読みふけていた。その年のはじめに父は胃癌の手術を受けていて、病名を知らされてはいなかったが、

〔出典〕

須賀敦子

『父の鷗外』

〔著者出題歴〕

- ・大阪大学
- ・大阪市立大学
- ・岡山大学
- ・関東学院大学
- ・聖心女子大学
- ・法政大学
- ・関西学院大学
- ・立命館大学

2

父親をおなじ病気で失っていた彼には、もしかすると自分もという気持はあったはずで、その父が溺れるように古文書を読んでいる姿には胸をつかれるものがあつた。商人の家庭、それも一代で身代^{しんたい}を築いた両親に育てられた父にとって、武士たちの世界は、自分たちの知らなかった虚構の秩序として、精神のよりどころにしようとしたのではなかったか。

30

1

④ 江戸時代の文化にかかわっていた人たちの知的生活がどういうものであったか、その背後にはどういうかたちの交友があつたか、というようなことを、それにふさわしい文体で練りあげた作品が鷗外の史伝だ、というふうに石川淳はたしか書いていて、それが私の読んだ史伝論でもっとも納得のいくものだったが、それでもまだ、なにかもつとありそうだという気がしきりにした。そのあたりのことにすこし光が射したのは、じかに史伝を読んだことではなく、ごく最近、『阿部一族』を読んでいてだった。明治天皇の死に殉じた乃木大将の最期に感銘をうけて書いたという『興津弥五衛門の遺書』にはじまる、いわゆる歴史小説群を境に、鷗外が題材を西洋の思想あるいは事物にもとめることをしなくなり、日本の過去に置くようになったのは、彼が日本の現状に愛想をつかしたからだという論旨をよく目にするが、読んでいて、『阿部一族』の底流にある、西洋臭さのようなものに私はふと気づいたのである。『阿部一族』は殉死一切腹という武士たちの慣習が、西洋人をふくむ部外者が考えるように、ただ野蛮な風習なのではなくて、確固とした哲学や美学に支えられていたという一面を明らかにしている。しかし、最後にこの一族が苛酷な滅亡に追いつめられていく過程を、共同体の論理に従わざるを得なかった社会への批判と読むこと

30

25

3

は可能だけれど、それと同時に、ギリシア悲劇的な運命の桎梏しごくとしても読めるのではない
かという考えが浮かんだとき、鷗外の晩年の作品への解読の扉がすこし開けたように思え
た。人間の不条理ふじりということが、ここでひとつの中心的な命題として克明にたどられてい
ることは確実で、その捉え方は日本／東洋的というよりはより西洋的せいようてきと思える。西洋的と
いえば、たとえば主君の犬をあずかっていた下男がその犬までを殉死しゆうしさせる場面などで
は、文体の格を一段下げて大衆文学ふうにしらえている点などからも、Xの見本の
ような鷗外がギリシア以来の文章の格の高低をあてはめているように、私には読める。よ
うするに、鷗外は西洋の技法を骨格しよくかくにすえて、日本的な題材しざいをあつかい、それを、たとえ
ば諸処しよしょに置かれた季節のスイイへのゲンキウウのように日本古来のレトリックれとりくで飾り
ながら、重く漢文に依存した文体を練りあげるといふ、比類ない統合を意識した作業がこ
こには見られる。この方向から『拍斎』以下の史伝を読めば、きつと明かりが見えるので
はないかと私は思いついた。

X

5 『汲江抽斎』について、私がまとまった意見のひとつも言えないうちに父は死んでしまっ
たが、私は、近頃になって、やっと 史伝への私なりの入口が見つかったような気になっ
ている。

(注) ○知行高……江戸時代、幕府や藩から与えられた所領地の石高。

45 6

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めよ。

a	b	c	d	e

問二 傍線部1「石川淳が鷗外の偉大さを繰り返し語っている」とあるが、「鷗外」の史伝に対す
る「石川淳」の評価が述べられている部分を含む一文の冒頭五字を、本文中から抜き出して
記せ。

--	--	--	--	--

問三 傍線部2「武鑑」とあるが、「武鑑」は父にとつてどのようなものだったと考えられる
か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- イ 日本文学の伝統を継承するうえで、正確に理解することが不可欠な資料であり、文学を
志す娘の読解力の試金石ともなるもの。
- ロ 主人公の生き様を通じて、人生の重大な岐路きろに立っていた自分の、曖昧あいまい・模糊ぼことしていた
進路に、明かりをもたらしてくれるもの。
- ハ 心に大きな衝撃を受けたときに、すでに自分が失ってしまったのどかな生活を想起きこさせ
てくれることで、現実逃避をさせてくれるもの。
- ニ 精神が危機的な状況にある際に、実人生ではありえないような安定感を想像させてくれ
ることで、心の支えとなっていたもの。

100

[illegible]

ホ 西洋の技法を利用しながらも日本的な素材を扱うという点に着目し、結局は古い修辞や漢文の影響を受けたものとして史伝を読むとすること。